

要 旨

つまずきの重なりはスムーズな学習を阻害する要因の一つと考えられる。本研究では、すべての生徒が評価規準のB基準に達することをねらいとして、少人数指導の中で個人カルテを用いたつまずきの早期発見・早期克服の手立てを探ることとした。最初に、見取りテストを実施し、その結果を生徒自身に個人カルテへ記録させ、学習への見通しをもたせた。次に、つまずきの克服策として言語材料に関する知識の再インプットや基本文を4領域で運用させる言語活動に取り組みさせた。その結果、各領域における習熟度の高まりや学習に対する意欲の高まりが見られた。

〈キーワード〉 ①つまずきの発見と克服 ②個人カルテ ③B基準の達成のための言語活動  
④少人数指導

1 研究の目標

単元末に習熟度によって再編成した少人数クラス（基礎コース）において、個のつまずきに応じた言語活動を行うことにより、言語材料の確実な習得を図る指導の在り方を探る。

2 目標設定の理由

中学校英語科のねらいの一つに「実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」<sup>(1)</sup>とある。これは、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことにおいて、実際のコミュニケーションを目的とし、基礎的・基本的な知識を運用できる能力を身に付けることを示している。

しかしながら、言語材料に関する習熟状況は生徒により様々である。すべての生徒に言語材料に関する知識とその運用能力を身に付けさせるためには、教師が一人一人の習熟状況を十分に見取り、個のつまずきに応じた適切な指導を行うことが大切であると考え。少人数指導では、生徒と教師の距離が物理的・心理的に近いという特性を生かして、つまずきの箇所と程度を丁寧に見取り、それを活用した指導が可能になるのではないかと考える。

そこで、本研究では、単元末において明確になった習熟状況を記録し、それを基に再編成した習熟度別少人数クラスにおいて、つまずきの内容に応じた言語活動を繰り返すことで言語材料の確実な習得を目指す指導の在り方を探ることとした。そして、このように、学習過程におけるつまずきの早期発見・早期克服の手立てを講じれば、個々の生徒が学習内容を確実に習得し、基礎学力の定着を図ることができると考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

指導過程における個の言語材料のつまずきを見取って個人カルテを作成し、それを基に再編成した習熟度別少人数クラスにおいて、個のつまずきの内容に応じた言語活動を行えば、言語材料の確実な習得が図れるであろう。

4 研究の内容と方法

- (1) 言語材料におけるつまずきの見取りとその克服の方法について、文献による理論研究を行う。
- (2) 言語材料に関する知識とその運用を習得させるための教材研究を行う。
- (3) 学習指導案の作成及び授業実践を行う。
- (4) 研究の成果と課題をまとめる。

## 5 研究の実際 I (実践への手立て)

### (1) つまづきの早期発見・早期克服のための指導体制

生徒が学習に主体的に取り組むのは、自己のつまづきの箇所が分かり、具体的な学習目標を自らもつことができたときであるとする。また、つまづき克服のためには、言語材料に関する知識のインプットに加え、聞く・話す・読む・書くという4領域毎につまづきを補充するための演習を繰り返すことが必要であるとする。そこで、本研究では、単元末の習熟状況を均一割少数人数クラスで見取り、その結果を生徒自身に個人カルテへ記録させることで自己のつまづきに気付かせ、学習への見通しをもたせることとした。そして、個人カルテを基に再編成した習熟度別少数人数クラスにおいて、つまづき克服のための言語活動を繰り返し行い、言語材料の確実な習得を図ることをねらいとした(図1参照)。

### (2) 見取りテスト

単元のまとめの段階における個々の生徒の習熟状況を明らかにするため、均一割少数人数クラスで見取りテストを実施した。見取りテストには、その単元で学習する言語材料に関する問題に合わせ、既習内容の基本文から予測されるつまづきそうな箇所を問題として取り入れることとした。解答用紙には、問題の観点とその「おおむね満足できる」達成状況を評価基準のB基準以上として明示した。「言語や文化に関する知識・理解」「理解の能力」「表現の能力(書くこと)」はペーパーテストで、「表現の能力(話すこと)」はパフォーマンステストでその習熟状況を見取ることとした。パフォーマンステストは、絵カードが表す内容について基本文を用いて口頭で説明するというピクチャーディスクリビングを個別に行うこととした(表1参照)。

### (3) 個人カルテ

単元のまとめの段階における見取りテストの結果を記録するものとして、個人カルテを作成した(次頁図2参照)。教師は、個々の生徒のつまづきの箇所と程度が記録された個人カルテにより、個に応じたつまづき克服策を探り、「つまづき克服の授業」に生かすこととした。そして、「つまづき克服の授業」後、再度習熟状況を見取り、つまづきの変容を確認することとした。また、テスト結果は生徒自身に個人カルテへ記録させることで、自己のつまづきに気付かせ、次時の学習への見通しをもたせることができ、学習意欲を高めることができると考えた。

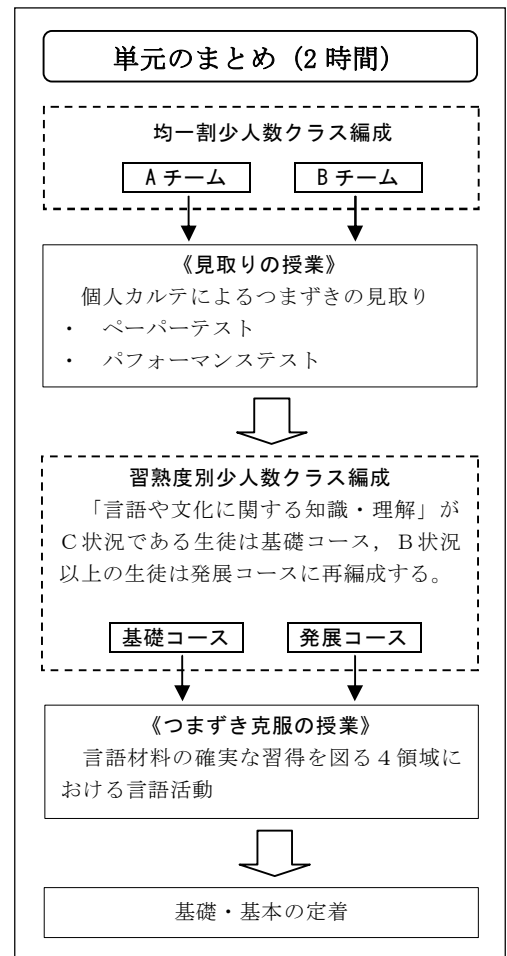


図1 全体構想図

表1 Unit 9の見取りテストにおける評価基準表

観点	評価基準	方法	評価基準(点)
〈言語や文化に関する知識・理解〉	基本動詞が書ける。	ペーパーテスト	A : 21~19 B : 18~13 C : 12~0
	基本文が書ける。		
	現在形と現在進行形の区別ができる。		
	be動詞が適切に使える。		
〈理解の能力〉	be動詞を用いて肯定文・疑問文が作れる。	ペーパーテスト	A : 3 B : 2 C : 1~0
	現在進行形を含む英文を聞いて誰が今何をしているのか理解できる。		
〈表現の能力〉	現在進行形を含む英文を読んで誰が今何をしているのか理解できる。	パフォーマンステスト	A : 3 B : 2 C : 1~0
	人が今何をしているところか現在進行形を用いて書ける。		
〈表現の能力〉	人が今何をしているところか現在進行形を用いて口頭で問答できる。	パフォーマンステスト	A : 5 B : 4~3 C : 2~0
	人が今何をしているところか現在進行形を用いて口頭で問答できる。		

個人カルテには、各領域における到達目標、評価基準、習熟状況の記入欄、C状況の生徒につまづきを克服させるための言語活動を記載し、単元目標の達成に向けた一連の流れを示した。裏面には、授業の振り返りを生徒が記入する欄と教師が個々の生徒にアドバイスを記入する欄を設けた。

個人カルテ

Unit 9 単元目標  
 ① 現在進行形の形・意味・用法を理解し、表現できる。  
 ② 人が何をしているところか述べたり、問答したりすることができる。

観点	領域	問題	到達目標	月日	月日
話す 語 知 や 識 文 ・ 化 理 に 解 関	現在 進行形 の 基 礎 知 識	ア	基本動詞を書くこと	点	点
		イ	基本文を書くこと	点	点
		ウ	現在形と現在進行形の区別(時制)	点	点
		エ	be動詞の区別(is, am, are)	点	点
		オ	肯定文・疑問文の作り方(語順)	点	点
			計	点	
			A・B・C		

観点	領域	問題	到達目標	A・B・C	
				月日	月日
理解 の 能 力	聞く	1	現在進行形を含む英文を聞いて、誰が今何をしているのか理解することができる。		
	読む (読解)	2	現在進行形を含む英文を読んで、誰が今何をしているのか理解することができる。		
表現 の 能 力	書く	3	人が今何をしているところか現在進行形を用いて書くことができる。		
	話す	4	人が今何をしているところか現在進行形を用いて口頭で問答できる。		

言語活動

つまづき別ワークシート：  
文法事項を再確認しよう！

基本文マスターシート：  
基本文を暗写しよう！

音読de復習！

カルタ：  
人の動作を聞き取ろう！

マッチング：  
人の動作を読み取ろう！

人の動作について  
書いて説明しよう！

絵の人物の動作について  
ペアで対話しよう！

1 - ( ) No. ( )  
 Name: ( )

バシフィックコース → 言語や文化に関する知識・理解からスタート  
 アトランティックコース → 理解の能力・表現の能力からスタート

図2 NEW HORIZON English Course 1 Unit 9の個人カルテ

(4) 言語材料の確実な習得を図るための言語活動

習熟度別少人数クラスの基礎コースは、「言語や文化に関する知識・理解」がC状況の生徒を対象としている。そのため、対象の生徒は言語材料に関する知識が不足しているだけでなく、言語運用能力も身に付いていない状況である。そこで、まず、言語材料に関する知識の再インプットを行うこととした。次に、基本文を聞く、話す、読む、書くという言語運用演習を繰り返すこととした。これらの言語活動には、絵カードやチャンツなどの視聴覚教材や教具を用いて演習の量を確保し、言語材料の確実な習得を目指した(図3参照)。

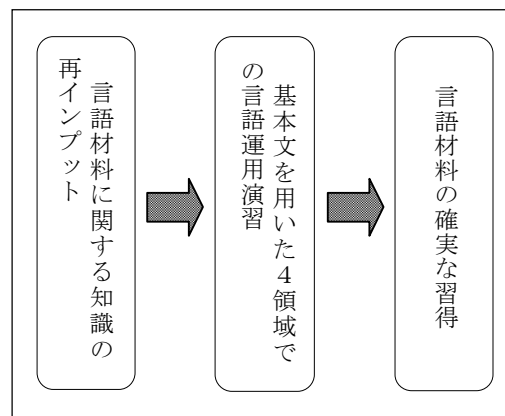


図3 習熟度別少人数クラス基礎コースにおける言語活動

6 研究の実際Ⅱ (授業実践)

NEW HORIZON English Course 1のUnit 6, 9のまとめの時間において、生徒が記録した個人カルテを用いてつまづきを分類・分析し、つまづき克服のための言語活動を行った。

(1) 個人カルテによる個のつまづきの見取り

単元のまとめの時間に均一割少人数クラスにて見取りテストを実施し(次頁写真1, 2参照), その結果を個人カルテへ記録することは生徒自身に行わせた(次頁写真3参照)。また、つまづきの状況を分析したところ、つまづきの原因の多くは「人称代名詞」や「be動詞」などの既習の学

習内容における知識不足であるということが分かった。また、「言語や文化に関する知識・理解」がC状況の生徒は、「表現の能力」や「理解の能力」においてもC状況であった。そこで、次時の「つまずき克服の授業」では、既習の学習内容を含む言語材料に関する知識の再インプットとそれらの知識を繰り返し使う言語運用演習を取り入れ、言語材料の確実な習得を図ることとした。



写真1 ペーパーテスト



写真2 パフォーマンス  
テスト



写真3 個人カルテの記録

(2) つまずきに応じた言語活動

授業の冒頭では、チャンツ・メモリーゲーム・つまずき別ワークシート等によって言語材料に関する知識の再インプットを行った。その後、「聞くこと」の能力を高めるための英文を聞いてその内容を表す絵を選択するカルタ、「読むこと」の能力を高めるための絵と文を合わせるマッチング(写真4参照)、「話すこと」・「書くこと」の能力を高めるためのピクチャーディスプレイングを行った。活動に当たっては、言語活動を通して習得させる基本文・基本語彙の精選を行い、それを基に準備した絵カードや英文カードなどを各活動での共通教材として用い、繰り返し基本文・基本語彙に触れさせた(図4、表2参照)。その結果、言語運用の演習を重ねながら徐々に基本文の運用ができるようになっていく生徒の姿を見ることができ、活動前と比べ、活動後はすべての観点において評価規準のB基準に達した生徒の割合が増加した(図5参照)。また、B基準には達していない生徒も個人内の習熟度は各観点において高まったことが分かった(表3参照)。以上のことから、知識の習得のみならず、言語運用の演習を取り入れたことは、言語材料に関する知識とその運用の両面に有効であることが分かった。



写真4 マッチング



図4 絵カード

表2 Unit 9の基本文

Koji is cooking now.
Is he swimming?
- Yes, he is.
- No, he is not.
What is he doing?
- He is swimming.

表3 個人内習熟度の高まり

Unit 9の活動後の確認テストで、個人内の習熟度の高まりが見られた生徒の割合	
観点	生徒割合
表現の能力	100%
理解の能力	93%
言語や文化に関する知識・理解	93%

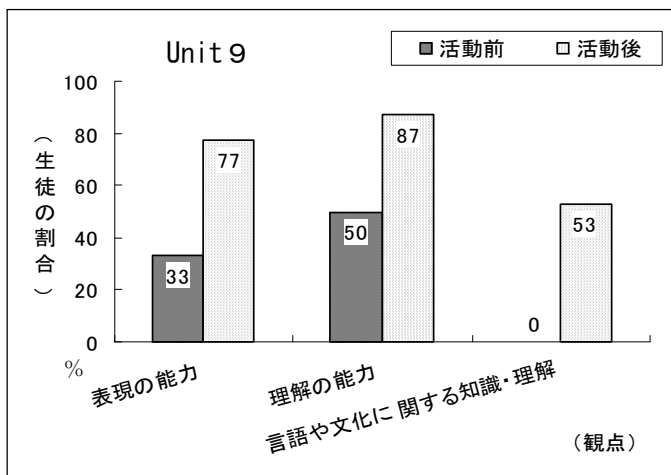


図5 評価規準のB基準に達した生徒の割合の変容

(3) 指導過程の改善 (図6参照)

Unit 6における授業Ⅰでは、均一割少数人数指導にてT1・T2が見取りテストを実施した。授業Ⅱでは、知識の再インプット、基本文を用いた言語運用の演習、活動後の習熟状況を見取るための確認テストを行った。この指導過程を通し、つまずきの克服に向け、進んで学習に取り組む生徒の姿が見られ、活動後の確認テストにおいて、評価規準のB基準に達した生徒の割合は増加した。しかしながら、ペーパーテストとパフォーマンステストを組み合わせた見取りを授業Ⅰの1時間で行うことは時間的に厳しく、正確な見取りを行うためには、更に指導方法の改善を行う必要がある。また、授業Ⅱにおいては、知識の再インプットと4領域の言語運用の演習を行うなど、1時間の言語活動量が多く、言語運用能力を高めるための演習が十分にできなかったという課題が残った。

そこで、Unit 9における授業Ⅲでは、指導の効率化を図るため、ALTを活用することとした。具体的には、均一割少数人数クラスでのパフォーマンステストをALTとのTTで行った。このことにより、個々の生徒の習熟度を見取る時間と個別支援する時間を確保することができた。また、言語活動の時間の確保のため、授業Ⅲのパフォーマンステスト待機中に「知識の再インプット」をペア活動で行うこととした。「つまずき別ワークシート」や「基本文マスターシート」を、教師の解説が無くても取り組むことができるように段階別のヒントや解答・解説欄を設け、生徒たちが適宜活用できるよう工夫した。これらの活動により、ペアで互いの知識を補充し合いながら、自主的に学習に取り組む生徒の姿が見られた。また、このように指導の効率化を図ることができたため、授業Ⅳでは、言語運用能力を高めるための演習に重点を置き、言語活動の量を確保することが可能となった。その結果、生徒の習熟度は高まり、「理解の能力」及び「表現の能力」においてB基準に達成した生徒の割合は、Unit 6に比べ、Unit 9では増加していることが分かった (図7参照)。

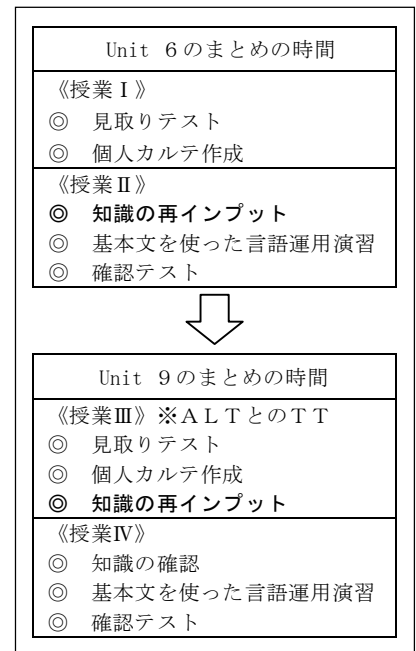


図6 指導過程の改善

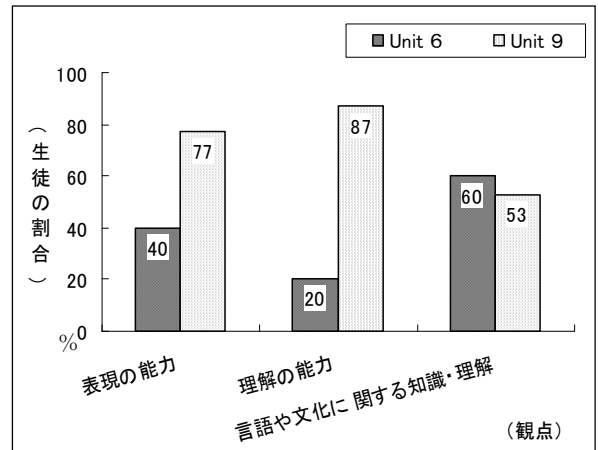


図7 評価規準のB基準に達した生徒の割合の変容

授業Ⅳでは、言語運用能力を高めるための演習に重点を置き、言語活動の量を確保することが可能となった。その結果、生徒の習熟度は高まり、「理解の能力」及び「表現の能力」においてB基準に達成した生徒の割合は、Unit 6に比べ、Unit 9では増加していることが分かった (図7参照)。

(4) 生徒の意識の変容 (基礎コース)

基礎コースの生徒に対する事前調査では、9割の生徒が「授業が理解できない」「英語は難しくなってきた」などの理由で英語学習に苦手意識をもっており、約6割の生徒が「英語は好きではない」と回答していた。しかしながら、事後調査においては、表4に示すように、すべての生徒が「英語は好き」と回答しており、意識の変容が見られた。また、つまずきの早期発見・早期克服を目指す授業に対して、すべての生徒が興味を示していることから、この授業は、生徒の学習意欲を

表4 授業に関する自己評価

質問項目	生徒割合
自己のつまずきを意識して意欲的に学習に取り組んだ。	94%
つまずきを克服することで、英語学習に対して自信をもち、やる気がでた。	89%
自己のつまずきに焦点を当て、克服する授業に興味がある。	100%

高める効果があったと考える。

#### ア 習熟度の高まりによる学習意欲の高まり

Unit 6のまとめの授業の前に、学習内容の各項目における習熟度について意識調査したところ、「とても分かる」「だいたい分かる」と回答した生徒は少なく、大半の生徒が学習内容を習得していると実感していないことが分かった。しかし、授業後、再度同じ調査をしたところ、「分かる」と回答した生徒がすべての項目で増加していた（図8参照）。このことから、評価規準のB基準達成の有無にかかわらず、個人内の習熟度を高めたことが、学習意欲の高まりにつながっているということが分かった（表5参照）。

#### イ 個人カルテの活用による学習意欲の高まり

生徒は、個人カルテで自己のつまずきの箇所や程度を把握したことで、学習への見通しをもち、そのことが生徒たちの学習意欲を高めていることが分かった（表6参照）。また、生徒は自己のつまずきを意識して学習に取り組む過程を通して、実際につまずきを克服し、英語学習への自信ややる気をもつことが分かった。

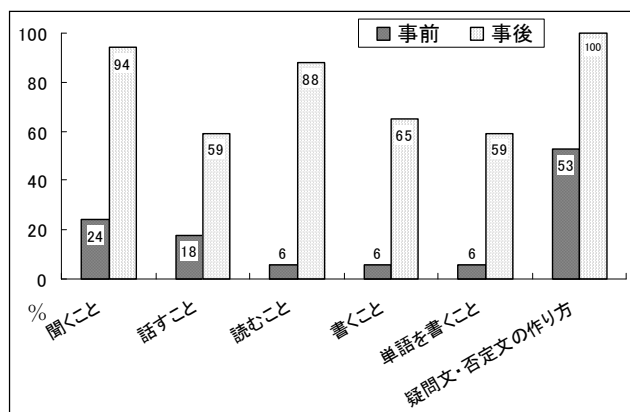


図8 Unit 6の学習内容が「よく分かる」「だいたい分かる」と回答した生徒の割合

表5 習熟度の高まりに関する生徒感想

- ・ どうやったら楽しく分かりやすく勉強するのか学びました。これからは、自己テストなども心がけて、自分の力ががんばっていきたいです。
- ・ 今日の授業は今までで一番楽しく覚えやすくて力が付いたのがよく分かった。

表6 個人カルテに関する生徒感想

- ・ 自分が勉強するところが分かりました。次の授業ではカルテが〇になるようにがんばります。
- ・ つまずきが分からずに、そのまま自分なりに勉強していたけどカルテをもらって、勉強しやすくなりました。

## 7 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

ア つまずきやすい箇所やつまずきの関連性を見付け、その原因を探るためには、個人カルテが有効であることが分かった。また、自己のつまずきに気付いた生徒は学習への見通しをもち、学習意欲を高めることが分かった。

イ 4領域で基本文を繰り返し運用するなどのつまずきに応じた言語活動は、個々の生徒の習熟状況を高め、言語材料の確実な習得に有効であることが分かった。

ウ 少人数指導にALTとのTTを取り入れることにより、より詳しい個の見取りと言語運用の質と量の確保等の指導の効率化を図ることができた。

### (2) 今後の課題

ア 単元の指導計画と評価計画をまとめたものとして、個人カルテを指導の冒頭から生徒に示すことで、到達目標を明確化した指導の在り方を探る。

イ つまずきの見取りとその指導・評価の方法について研究を重ね、効率的な少人数指導の在り方を探る。

### 《引用文献》

- (1) 文部省 『中学校学習指導要領解説－外国語編－』 平成11年 東京書籍 p.6

### 《参考文献》

- ・ 松本 光弘・他編 『習熟度別指導・少人数指導を成功させる』 平成16年 教育開発研究所
- ・ 斉藤 栄二 『英語授業レベルアップの基礎』 1996年 大修館